

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

雨降り、風おとろおどろしかりける夜、二条の中納言実綱卿の家に侍ども集まりて、

すすろ物語りしけるに、「ただいまいつくへ行きなん。東三条の池の辺へ向かひなんや。」など言ひ

けるを、ある侍、「かしこうまかるよ。」と言ひたりければ、あらがひかためてけり。傍輩ど

も、「そのしるしには、池の中島にくひを打つべし。その後、おのおの行きて見るべし。」と言へば、

「さらなり。」とて、この侍立ちぬ。

傍輩ども思ふやう、「この者は、しぶときをこのものにて、せらるる事もぞある。い

ざ、先立ちて、臆するやうなるはかり事めぐらさん。」とて、二、三人言ひ合せて、さいほう一、

讃岐わらざ一枚を持ちて、急ぎ先立ちて、かの池の中島なる木の上にのぼりて待つところに、この侍、

案のごとく池をわたりて中島にきて、くひを打たんとす。その時、木の上より讃岐わらざを投げ落とし

たりければ、この侍すこし立ち退きて、三帰を唱へてゐたる所に、重ねてさいほうを投げ落としたりけ

れば、池に投げ入れられて水音高かりけるに、おどろきまどひて、あわてふためきて逃げにけり。傍輩

ども、しおほせて、木よりおりて、さりげなしにてかへりゐたるところに、この侍青ざめて出できたり

けり。「いかに。」と問ひければ、「一番にからかさばかりなる物落ちきつれば、命にまさる物なしと思へ

ば、逃げてまゐりたるぞ。」と言ひけり。さて、負けわざの事し侍りけるとぞ。

（古今著聞集」から。）

（注）二条の中納言実綱＝平安時代後期の貴族である藤原実綱。京都の二条に邸宅があった。

東三条＝東三条という場所に建てられていた邸宅。

傍輩ども＝同僚たち。ここでは、「ある侍」の同僚たち。

中島＝ここでは、池の中に浮かぶ小さな島。

さいほう＝太く長い木の棒。

讃岐わらざ＝讃岐地方（現在の香川県）で作られた、わらで編んだ敷物。

三帰＝仏・法・僧の三宝を信じ、救いを求めること。ここでは、お経の一種。

(ア) 線1「さらなり。」とあるが、それは誰がどのような発言をしたことに対して「ある侍」が言ったことか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「傍輩ども」が、東三条の池に行った証拠として池の中島にくだいを打つように言ったこと。
- 2 「中納言実綱卿」が、誰にも見つからずに東三条の池の中島にくだいを打つように命じたこと。
- 3 「傍輩ども」が、東三条の池に向かうなら代わりに池の中島にくだいを打ってほしいと頼んだこと。
- 4 「中納言実綱卿」が、ただちに出発して東三条の池の中島にくだいを打つように指示したこと。

(イ) 線2「あわてふためきて逃げにけり。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「ある侍」が、東三条の池の中島に着くと、何者かによってくだいが打たれていて不思議に思っていたところ、突然木の上からいろいろなものが落ちてきたことに驚いたから。
- 2 「ある侍」が、東三条の池の中島にくだいを打とうとしたところ、突然木の上から何かが落ちてきたり、何かが池に投げ込まれて出た大きな水の音を聞いたたりして驚いたから。

3 「ある侍」が、東三条の池の中島に到着すると、すでにくだいが打ちつけられており、三帰を唱えていた男が突然唐傘のようなものを池に投げ入れ、その大きな音に驚いたから。

4 「ある侍」が、東三条の池の中島にくだいを打とうとしたときに、突然木の上から讃岐わらざが落ちてきて、三帰を唱える男が現れてさいぼうを池に投げ入れたことに驚いたから。

(ウ) 線3「負けわざの事し侍りけるとぞ。」とは、ここでは「約束が守れなかったので、「ある侍」は「傍輩ども」にごちそうをふるまった。」という意味であるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「ある侍」は、東三条の池の中島にくだいを打って戻ってくることを「傍輩ども」と約束したが、池で恐ろしい思いをして逃げ出してしまい、自尊心に勝てずくだいを打ったとうそをついたから。

2 東三条の池に行くことを「傍輩ども」と約束し、「傍輩ども」とその中島に行つてくだいを打つ速さを勝負していた「ある侍」は、くだいを打つことができず、自分の負けを認めたから。

3 東三条の池の中島にくだいを打つことを「傍輩ども」と約束した「ある侍」は、くだいを打つ途中で逃げ出してしまったことを「傍輩ども」に知られてしまい、申し訳ないと思ったから。

(エ) 4 「ある侍」は、東三条の池に行き、その中島にくだいを打って戻ってくることを「傍輩ども」と約束したが、結局くだいを打てず、約束したことをやりとげることができなかったから。
本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「傍輩ども」から意地っ張りで愚か者であると責め立てられたことに我慢がでなくなった「ある侍」は、雨と風が激しく吹く中、勢いで外に出て行ってしまった。

2 「傍輩ども」は、「ある侍」をだまそうと急いで先回りをして東三条の池の中島に着き、そこに落ちていたさいぼう一本と讃岐わらざ一枚を見つけて拾いあげた。

3 東三条の池の中島から青ざめて戻ってきた「ある侍」は、唐傘のようなものが落ちてきて、命より大切なものはないと思つて逃げてきたと「傍輩ども」に説明した。

4 東三条の池の中島にいるときに、「ある侍」はもう少しで木の上から落ちてきたものに当たつてしまふところだったが、運よくその場で転んだことで命拾ひした。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、人よりも長い鼻を持っている「内供^{ないぐ}」という僧がいた。

物食ひける時は、弟子の法師に、平^{ひら}なる板^いの一尺ばかりなるが、広^{ひろ}さ一寸ばかりなるを鼻の下にさし入れて、向かひ居て、上^うさまへ持て上げさせて、物食ひ果^かつるまではありけり。荒く持て上げければ、

腹を立てて物も食はず。されば師一人を定めて、物食ふ度毎^{ごと}に持て上げさす。

それに心地悪^{にく}しくてこの法師出でざりける折^しに、朝粥^{あさかゆ}食はんとするに、鼻を持て上ぐる人なかりければ、

「いかにせん。」などと言ふほどに、つかひける童の、「我は能く持て上げ参らせてん。更^{さら}にその

御法師にはよも劣らじ。」と言ふを、別の弟子の法師聞きて、「この童のかくは申す。」と言へば、中

大童^{おうちやう}子^こにてみめも穢^{けが}れなくありければ、上に召^よし上げてありけるに、この童鼻持て上げの木を執^とりて、

うるはしく向かひ居て、善き程に高からず低からず持て上げて粥を嚙^からすれば、この内供、²「いみ

じき上手にてありけり。例の法師には勝りたり。」とて粥を嚙るほどに、この童、鼻をひんとて

側^{わき}様に向かひて鼻をひるほどに、手震ひて鼻持て上げの板揺^ゆぎて、鼻外れて粥の中へふたりと打ち入れつ。

内供が顔にも童の顔にも粥^{かゆ}進^{すす}りて、³「物掛かりぬ。内供、大きに腹立ちて、⁴「己は凶々^{きうきやう}しかりける心持ち

たる者かな。我ならぬやむことなき人の御鼻にもこそ参れ、それにはかくやはせんずる。おのれ立て立て。」

とて、追ひ立てければ、立つまに、「世の人の、かかる鼻持ちたるがおはしまさばこそ鼻持て上げにも

参らめ。迂愚^{うぐ}の事宣^{のたま}へる御房かな。」と言ひければ、弟子ども、物の後ろに逃げ退^{しりぞ}きてぞ笑ひける。

〔宇治拾遺物語〕から。

(注) 一尺Ⅱ約三十センチメートル。

一寸Ⅱ約三センチメートル。

中大童子Ⅱ仕えている中で、年齢や経験が中堅である子ども。

(ア) 線1「この童のかくは申す。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「童」が、具合の悪くなったいつもの「法師」に代わって、うまく「内供」の鼻を持ち上げますと言ったこと。

2 「童」が、具合の悪くなったいつもの「法師」よりも上手に「内供」の朝粥を手にとって差し上げますと言ったこと。

3 「童」が、具合の悪くなったいつもの「法師」をお願いされ、「内供」の鼻を持ち上げてみたいと言ったこと。

4 「童」が、具合の悪くなったいつもの「法師」に代わって、上手に「内供」の朝粥を作ってみせましたと言ったこと。

(イ) 線2「いみじき上手にてありけり。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「童」は「内供」の指示に従い、「内供」の鼻を持ち上げる板の高さを適切に保っていたこと。

2 「童」は「内供」の正面できちんと「内供」の鼻を持って、行儀良く朝粥を食べていたこと。

3 「童」は「内供」の向かい側に座り、「内供」の鼻を丁寧扱いながら朝粥を食べていたこと。

4 「童」は「内供」の前にきちんと座り、ちょうど良い高さで「内供」の鼻を持ち上げていたこと。

(ウ) 線3「大きに腹立ちて」とあるが、「内供」が腹を立てている理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「童」は、「内供」の鼻を持ち上げている板を持つのがつらくなったので、くしゃみをするふりをして板を朝粥の中に落とし、「内供」の顔やあたり一面を汚してしまったから。

2 「童」が、横を向きながらくしゃみをした時に、「内供」の鼻を持ち上げている板を揺らしたことで「内供」の鼻が朝粥の中に落ち、「内供」の顔やその周りを汚してしまったから。

3 「内供」が満足そうに朝粥を食べている時に、急にくしゃみをしたくなった「童」は「内供」の鼻を持ったまま目の前でくしゃみをして、「内供」の顔や朝粥を汚してしまったから。

4 「内供」がくしゃみをしようとしたところ、「童」がとっさに横を向いた勢いで「内供」の鼻を持ち上げていた板を外し、「内供」の鼻を朝粥の中に落として汚してしまったから。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 長い鼻を持つ「内供」は、一人の法師に決めて食事の時に鼻の下に板を入れさせていたが、いたずら好きの「童」にその役目を交代させたことを後悔し、「弟子」たちに嘆いた。

2 いつも「内供」の鼻を持つように命令を受けていた「法師」は、「童」を呼んで「内供」の鼻を持ち上げることを止めるためにはどうしたらよいかとひそかに話し合っていた。

3 「童」の態度にひどく腹を立てた「内供」は、身分の高い人の鼻を持ち上げる時にも同じようなことをするのかと厳しく問いつめたが、逆に「童」から言い返されてしまった。

4 「内供」は、荒々しくて乱暴な「童」から恥をかかされたことに腹を立てて「弟子」たちを呼び出して見たものの、「弟子」たちは部屋の外に逃げ出してひそかに笑っていた。